

嘉瀬今昔

木立 民五郎



◎名も無い人達が築いた大きな工事

津軽為信が、弘前に築城工事を始めた頃、津軽一帯の村落から、五人十人と賦役人夫が割当られた。このなかに私達の先祖が参加し、石垣工事にたづさわった話をきいたことがある。

遠い昔の話であるが、今、春の桜の花が咲く時、お濠りからうづ高く積まれた石垣を見る時、先祖の一人一人が、血と汗を流して賦役した跡を漫然と眺める訳にゆかない感慨に襲われる。

藩主の権力と封建という制圧の中に生きた当時の農民が、無言の中に築き上げられた石垣の高さが、私達子孫に何かを語っている気がして、さんざめく歓楽の花見が、歴史の裏街道を同時に見せていると思えない。

こんな津軽の姿を、誰かが書いたことがあるだろうか、このことは日本国中のどこの築城工事にもあつた事実なのだ。

中国万里の長城の練瓦の一つ一つに名も知らない農民の汗が果しない年月をかけて積み上げられたと同様に、下つて津軽新田の開発に、幾つかの哀史が残っている。嘉瀬と幾つかの溜池、何本かの堰が、先祖の人達が語つたことのない、水田開発の足跡が残っている。

曰く佐左エ門溜池、弥太郎放、大堰口、新放、田十川の堤防が、モッコ、エンビで築堤されたのは、つい最近大正時代の話である。

◎刑罰

昔は家一軒建てるにも容易なことではなかつた。家を建てた者は、その人一代の最高の成功者と呼ばれた。その子は屋根をふき替えれば、先づ先づの人物とされた。

これ程まで一本の柱、一本の土台の値打があつた。木材すべては藩にある。

検定で教員になつた土岐兼房氏の作文指導が、当時の特高に覗まれ、台湾に追れ、新興短歌の川崎むつを主宰の出帆旗に投稿していた私なども、結局特高の手にかかり、四ヶ月程、県警の房に撃かれたのも、嘉瀬の現状を真面目に書いたことから端を発している。

二、二六事件から戦争の火は、日本をまたたく間に燃えひろがり、若い人達の血は、海の向うに散って行つた。

この頃、村は、今の土地改良の先端である、客土、根曲り竹を布設する暗渠排水工事で、一村挙げて工事に従事した。併し、これでは嘉瀬の稲作増進の道が解決出来なかつた。

洪水地帯の嘉瀬はまだ干旱地帯でもあり、水量に恵れてなかつた。

溜池あり、小田川あり、飯詰川と水不足は考えられない地域だったが、溜池は、田騒^カきが終れば、ほとんど期待出来ず、小田川も上流喜良市村が我田引水で、嘉瀬の人達が眠い鉢を夜明けまで酷使して、わづかに水田をぬらす程度だつた。飯詰川に至つては、ただ川と名のつく、川底が道路になつて、雨降り以外は水の流れを見ることが出来なかつた。

何十年来、夜水を引く人達がシノクチ、中道道路に、ヌマを着て、田植終りから、三番除草が済むまで家に帰ることもなく、堰口に寝泊りしたことだろう。為に病気になる早死の多かつた水利史でもある。

農道の無い地域が多く、肥料の運搬、稲付けの不便は、苗付け馬と稲付け馬が行交う村としての汚名も残っている。

水の解決、農道の解決に取組んだのは三十年の歳月を経ていない。村で一番の困難な箇所を解決することは、数箇所の水飢饉を解決する

の許可を必要としたし、勝手に山から伐り出すことが出来なかつた。

木材盗伐は大変な刑罰だつた。美林を誇る津軽の山々が残っている蔭に、厳しい管理の掟があつた。

今嘉瀬の八幡宮西にあるタデコは、木材盗伐の刑罰仕置の跡地と古老の語り伝えがある。

四尺に五尺の便所一つつくるため、山からの盗伐が見つかり、タデコの刑場で、五十打ち、百打ちの刑にあつて、氣息エンエン、縁者にかつがれ、わが家に帰つた昔の建築とは、百姓にとつて泣くに泣けない悲しい生活の歴史だつた。

今日映画、テレビで見る武家屋敷の美しい住い、家並びを見る時、百姓だけの村落の何んと見すばらしい風景であることか。

◎農業水利

昭和の初期まで、嘉瀬の稲作は凶作の連続だつた。水害、冷害、昭和九年頃は、役場隣りの郷倉で、『ワラビ』の根を叩く村人の槌音が長く続いた。

昭和十年の水害は、田十川、飯詰川、小田川堤防の決壊で、部落の西一帯一面は、満々と濁水が湖をつくり、十日以上も水は、稲をメチャメチャにし、南は毘沙門小学校の道路まで達した。

凶作というにはあまりにも痛々しい惨状だつた。斯うした歴史の積み重ねと闘つた嘉瀬の人達には、明日の稲作について、何を考えてよいか大きな迷いがあつた。

短歌に俳句に、小説、詩と、東北農民の姿は、全国的に広がつて行つた。渡辺順三という作家が書いた当時の言葉に、『これが米のなる木か』と、穂もない立枯れの田圃が表現されたのも、この頃の作品で

ことになる。駒留揚水ポンプがそれである。小田川にかかる一番頭首工から六番頭首工もそれによって緩和され、機織、大堰新放、三本柳放しと、一挙に水不足が取除かれ、菘を着て、夜泊りする者はいつか消えてしまった。

次は、洪水からの脱却である。排水機揚が駒留と萩元に施設され、新放、三本柳放、旧十川添えに五米巾の放水路と、金木一間堰の拡幅が為されたが、これ等工事費に対しては、国・県の補助以外に自己負担に関する費用は、関係者の大多数が背った。

農道の増設は、農作業を著しく早め、遠隔の地ほど作業が早く、苗付馬、稲付馬の汚名は昔語りとなった。

排水工事としては、雲雀野樋閘、三本柳樋閘、押上揚樋閘と旧十川に添って三ヶ所自動扉付樋閘が出来た。これは、排水ポンプ機の幾倍かの偉力を発揮したか、一般関係農民の知らないところである。

これ等、土地改良事業の悉くに反対した若い者もある。そしてその後に従いて、旗をかついだ幾十人かの人達よ、水は無心に万辺なく土をうるほし、溢れる水は、差別なく排除されているのだ。

◎嘉瀬人あれこれ

嘉瀬で戦争に参加した特異の兵卒で、西南の役に参加した鳴海某、日露の役では棟方万九郎氏、捕虜となってシベリヤ鉄道の貨物列車で当時のモスクワ、レニングラードを経、ドイツハンブルグから日本に帰った物語りは大変な苦勞の連続で、貨物列車数十日の旅は、豚の骨を煮た汁に、コヌカをまぶしての食事だったという。残念乍ら西南の役に参加した鳴海某の話聞く機会がなかった。

また日露の役に参加した中柏木の原田薫次郎氏は、夜山合いの谷で

の差で村長当選の鳴海由次郎氏。津軽鉄道の気道車と相撲をとって、肋骨数本折ったが、間もなく回復した小栗崎の伊藤亀吉氏。津軽民謡の元祖とされた黒川桃太郎氏から、乗り合い馬車で一生を通じた間山喜代吉氏。カドの利一こと日米拳斗の創始者、RABキャスター山中達一の父の山中利一は、戦前日本右翼の頭目、頭山満の右腕として二十年も長生きし居たら、どんな人物が嘉瀬から出たことかと思深いものがある。

郷倉破り事件として、マスコミが未だに忘れてない米騒動の村長、工藤保次郎氏の事跡については、水田開発等、薬師様の山交換も併せて、その功罪一言で語りつくせないものがある。

大正末期から昭和初期にかけて、三羽鳥ならぬ三へげ。即ちジュッタこと吉崎十造氏。半四郎万作こと舛甚万作氏。ジャンボ専こと松川専五郎氏の三人のへげ人も缺せない。嘉瀬の名物であったようだ。

有名人と謂えば、マラソンで名を馳せたヨサこと沢田与三郎氏。昭和に入って、モモに次ぐ民謡で名を馳せた鎌田稲一氏。三俵かつぎで嘉瀬のナホレこと斎藤直衛氏。劇場経営日之出屋で一生を通じたダイワンこと木下千代吉氏。この人達の二代目は、何れも歌の吉幾三となり、ナホレ長男は今、県警察界の最高峯斎藤直義氏。ダイワン日之出屋の二代目は家具のキノシタとなって県内切つての成功者になっている。

◎呼び名っコ

嘉瀬には昔から、屋号か何か知らないが、おかしな呼び名があった。即ち、ナダ、ヤリ、テッポウ、大砲、ツケゲ、カラス、バンドリ、ガチョ、カニ、ガンクラ、ガンチョ、ムジナ、ショウユ、ナバヨシ、タ

炊事した時の話。ハンゴウで飯をたいたところ、色が白くなくそれでも空腹にまかせて食べ終ったが、朝、同じ水たまりのところへ行つて、米をとごうとしたら、これが少し離れた小高い丘から流れて来た戦死者の血のたまりで、愕然とした戦争の一頁。

シベリヤ出兵に出た古町の中村正俊氏の父中村正一。鍛冶町の吉崎某、満州事変で、敵紅旗兵に戦傷した松川巻雄氏。日露の役で功七級の勲功に輝いた津田某は、四大節の行事あるごとに、小学校の講堂に当時は珍しいモーニング姿で参列した誇り高い姿も、懐しい思い出の一つだ。

大工の土岐五郎吉の爺さんは、今の出稼ぎで四六時村を出て旅稼ぎが多かったので、他国での話材が多く、ふぐの中毒にはローソクのロウが利め高い話など、どこかの海辺で漁師がふぐを煮ていて、頃合いを見てふぐ鍋にローソクの灯をかざし、のぞき見たら、ふぐ鍋にローソクのローが落ち、ふぐの身が溶けてしまったので、爾来ふぐの中毒にはローソクのローという話など巧に語りきかせたものだ。

いま一人これも大工職の十のオドこと、沢田西之助氏も、殆んど旅から旅の出稼人だった。村役場近くの清久溜池のほとりに居を構え、殆んど毎日の如く役場に顔を出し、自分の土地が誰かに占領され、これをどうしてくれるんだと村長に迫った。白いアゴ髯をしごき、小使室に長いこと坐つて一日を過ごした。或る時、食事時、沢田西之助の家へ行ったら、炉端にゲンゴロ虫、蛙、どじょうを串刺しに、おいしそうに食べていた。自分が考案した耕作工具を幾つも持っていて、遠い日これを何処で使ったかを聞かしてくれた。

河童から骨つぎの伝授を受けた古町鳴海勲の父鳴海万次郎氏。年齢

バコヤ、マイド、キイシ、ガコ、オント、キント、アチャ、ムサシ、エンパ、トンケ、ヤマコ、アメコ、ノゴ、カンチョオバ、マダ、トンダ、トタヤタ、アンシュウ、トチャム、新家、北家染屋、カド、百八、チャマ、マンジョ、デンタオジ、クルマ、ハッチョウ、カドコ、ジノアニ、オンチョアニ、ヨシアニ、デンノゴウ、ジンジャム、サネム、デネド、ハンベイ、タナゴロウと、古町地域に屋号とをつかない名称で、すぐその家を示す呼び名が多かった。以下後町、畑中、冷水、小栗崎と、町内に続いて、新しく伸びた町内には、だんだんその呼称が薄れて行った。

まだそのほか、クジャム、七ジャム、デンジャム、トンボ、トボ、ニチャブロウ、シンジャブロ、アカスケ、アラマ、イッポ、キツロクヒンタ、シュッタ、ガンタ、マンタ、ニッケ、ナンチョ、ジヘイ、ゲジド、ハナジョ、エド、エドアニ、ハチグロ、クラカキ、ヤロゴ、カキオジ、コピカナ、チョサナ、コシチ、ゴデサマ、アネアニ、アヤニ、クラアニ、オンチョアニ、ウシオジ、クジアニ、ジュハ、オンケ、ジュベ、マメトラ、カモコ、ヤヅ、チャリ、トリケと軒並の名称にアクセントの違いで、ヤマコが二軒あり、職業からくるスマタキ、ヤネフキも屋号になり、万吉アシタ、長八ユカタ、ヨシタ風呂敷、面白い人の特長をとらへた呼び名もある。

昭和に入って、ケリ、ヤワラカ、タマシも面白い、いつ誰がどこで何んの理由で、その由来をたづねたら、一つ一つに味わいある物語りがひそんでいるかも知れない。

◎話シッコその一

嘉瀬の部落には、伝説が秘められていたかどうか知らないが、早く

から一本イタヤ、イノミ、馬頭観音の大木がていていとそびえ、工藤の墓地にウドの松、庵寺に榊の大木が年代も知らず、天高く突立ち、同じ境内にイタヤの木が、これも年輪を数えること忘れたように、お詣りの村人から水をかけられていたが、庵寺改築の際伐採されて今は無い。

大木のあるところ必らず妖怪の話が生れ、イノミは梅雨時になるとトロコが下った話が出た。

車町から鍛冶町に抜ける、山兵の曲り角は、いつも薄気味の悪い話が出て、日が暮れると淋しい場所の一つだった。

また、古町の佐野前丁字路は、松次郎屋敷から下コに向って、棺桶を背った男の姿が、時たま話題になった。

昔ジンヂャム屋敷昇は墓地であったとか、大きくもないタナキがあつて、狭い下コの道路は、夜道を通る人があまりなかった。

前町から後町に通じる道路側には、卒塔婆が三本程並んで、塔婆にはさまれた鉄の輪は、こども達が力いっぱい廻すと、輪は勢いよく音を立てて廻るが、後廻りすると、地獄行きだと知らされているものだから、鉄の輪を廻すこどもの顔は、真剣そのものだった。

いつの頃卒塔婆が立ち、そして、その供養が誰のため行われたものか、遊び盛りのこども達には、はかり知れない恐怖と、それでも鉄の輪を廻す遊びは五十年前まで続いていた。

大正末期まで、古町中村の広い屋敷裏では、よくこどもの泣声があった話もあったが、道路に街灯がつくようになった今は、誰もそんな話を忘れてしまった。

◎話シッコその二

鍛冶町の南端にある薬師堂は、ヤクスコと呼ばれ、苗代の道路わきにきれいな水が湧いていた。サルケを焚いた頃は、トラホームで名高い部落だったから、目くされも多く、ヤクスコの湧水は目くされに効めがあると云われ、ここで目を洗っている年寄りが多かった。

ヤクスコの周囲は、昔山から木材を流して貯木場として使用されたと言言伝いがあり、万石に近い木材が埋れているという。大正の初め、この附近を掘った人もあったが、一本の木材も出ないまま、ついに中止した話もある。併し、ヤクスコから少し離れた水田から時々余の木材が出ることもある。

伝説は事実なものか、大堰の水は大雨の時は、昔ながらの沼になることは、私達しばしば見る現象から推して、かつて車町に水車がかけられた話を総合して、小田川の水が水量豊かな頃は、木材を水で運んだ昔、ヤクスコ辺が貯木場となったことは、満更のつくり話でないと思っている。

× × × × × × × ×

思い繞らして二百年、二百五十年の藩制から、更にさかのぼって、嘉瀬の地形は古い文化の香りがいっぱい匂っている汲めども尽きない集積土と考えている。

一ロメモ
※ 弘安庚辰三年五月、安東水軍元軍と戦う、大風雨に双方舟沈み、安東助舟に敵味方三十数名救助、十三浦に帰る。

※ 正応巳丑三年、安東福島城主、安東船をしたて、元寇の捕虜二十八人を乗せて唐国に帰す。

史ト
歴ツ

工藤次左衛門様御知行所地

- 一、萩元上田 老畝六歩
- 一、同所下田 老反三畝十三歩 分米九斗四升
- 一、同所下々田 七反一畝二十二歩 分米三石五斗八升七合
- 高反別御本帳へ逸々引合相違無御座候
- 則 日 對馬源右エ門 伊丸岡佐太郎
- 田方合 八反六畝十三歩
- 分 米 四石六斗五升九合
- 右田方御定法値段にて貴殿方に五百目に定め候
- 天明巳年二月十四日

渡人 嘉瀬村 安 郎 次
受人 嘉瀬村 新 太 郎
庄屋 仁左エ門
五人組 万右エ門
三 助
喜左エ門

表書也
則 日

故有而此方所有之所無居後、自分受取渡の先、その名書の通年有と重而取扱の下は無之様申上候。

安永戊年七月十八日

工藤 次左衛門

頼母子講請書

一 番
一、前セリ 七拾目 勘 助
預り錢ノ事
一、合五百五拾目ハ定 但シ六拾文遺也
右之儀、惣御連中様処分只今慥ニ預り申出実正ニ御座以尤利足之儀者老分之利足ニシテ、元利共其時ニ差還可申以 萬壹壹辺成共還兼以ハバ受入方ニテ相還可申候爲、借用之預り手前之件如件。
寛政 戌 午 二月十九日

本人 嘉瀬村 内 海 勘 助
請人 嘉瀬村 能登屋 利 八

御連 中 様



その一 蛇 沼

何時の時代のことであろうか？

中柏木村に、萬吉という若者が、山菜取りに出かけ村を出た。三方が山で、木が陽をさいぎり鬱蒼と繁茂して、薄暗く淋しい大池の端に来て、その大池の端から苗代沢を山に向って上りかかると、袖道のかたわらに二間ほど長い大蛇が『とぐる』を巻いて、鎌をもたげ、眠光するどく萬吉をにらんだ。

驚いた萬吉、その場に腰をぬかしてしまった。なんとかこの場をのがれようと、かねて知人より聞いたことのある呪文の『シバリ唄』を無我無中で読みあげたところ、アーラ不思議、さしもの大蛇も、ナメクジに塩、だんだんゲンナリとなり、のびて動けなくなってしまった。

三枚は焼けずにそのまま残ったという。

村人は今でも、この沼を『苗代沢の蛇沼』と呼んでいる。

その二 ビツキ溜池

天明三年の津軽大飢饉の年のことです。中柏木村から西南に七・八町、野原のススキも枯れ果てた平原のなかを、さぞかし名のある氏族の女が一人、力なくいまにも倒れそうに、ススキをわけてさまよい続けていた。

空はどんよりとしていて、今にも雪が降ってきそうな重苦しい雲が平野を、おおいかぶさっている。

やっとの思いで、ここまでたどりついた女は、背負っている子供が腹をすかして泣き続ける声も耳に入らないように、疲れきった足をひきつり、溜池の端にすわりこんでしまった。

苦しみぬいた母親は、どうしようもなく心を鬼にして、自分の子供を置き去りにし、いづこへともなく、ススキのなかを分けて去っていった。その後の母親の生死は誰も知るよしが無い。

あわれ子供は、母親の後を慕いながら、風に吹かれ、雨に打たれ、池の端で野たれ死したそうなる。

どんよりと雨雲のたれこめた日、この池の端を通ると、『オツカアどごさ行った。腹へった。飯食ってえ、飯食ってえ』と泣きさけぶ子供の声が、今でも池の面のカヤのなかから聞いてくるという。

誰言うとなく、この池をビツキ溜池と言うようになった。

萬吉はようやく山菜のある山にたどりつき、山菜をわんさか背負って、今朝登ってきた道を、日ぐれ時下ってきた。

萬吉今朝『シバリ』をかけた大蛇がどうなっているかと、寄ってみると、まだ大蛇はゲンナリとのびていた。もとにもどそうと『シバリ』唄を積みあげようとするも、萬吉、『シバリ』を戻し方法の呪文を聞いていないので、そのまま家に帰った。

家にたどりついた萬吉、家に入ったとたん、妙に身体がだるく、身ぶるいがして、寒気をおぼえ、飯も食わずに床に倒れてしまった。

家族の者は、山に山菜取りにいった、疲れたのだろうと気にもかけていなかった。一晚中うなされどうしの萬吉、朝になって、妙に身体がかゆいので、はだかになってみると、身体中一面に赤い紋の、魚のウロコのような斑点が浮きでて、腕にウロコが三枚ついていた。

驚いた萬吉、あの時大蛇に『シバリ』をかけなければと気がつき悔んでも後の祭り、事の次第の祟りを家族の者に一切を語ったので、家族の者、仏壇に線香をあげるやら、神棚にお神酒をあげて祈るやら、大騒動。早速祈禱師のところへ走った。

祈禱師、祈りをとないてのたまわく、

『萬吉に前世の悪いことは無もねいが、萬吉の（シバリ）かげだ大蛇ア、雄です。それで萬吉ねかて殺さいだ雄蛇のカガアの雌蛇ア、夫の仇討だねばまいねて、萬吉さ崇っているのだね。萬吉ア不びんだばて、私の祈りでだば、どうにもならね』と、手の打ちようがなかった。

それから三日三晩、もだい苦しみ萬吉は祟り死んでしまった。家族の者、涙にくれながら陀火に附したが、萬吉についていた『ウロコ』

その三 八次兵衛屋敷

中山山脈の裾野に広がるところに、八次兵衛屋敷という広い丘陵地帯の野原がある。（今は開拓されて、畠やリンゴ園となっている）

村人の一人が日暮れどき、この野原を通ると、六尺近い大きな『アヤマ』が咲いているのを見つけた。村人は此の辺には無い珍しく大きなアヤマだと、村の人みんなに見せようと、折り取って帰ってくる途中、身の丈六尺もある旅の坊主に出合った。坊主はアヤマの花に目をとめて村人に、

『そのアヤマの咲いているところは、むかしそこに長者様が住んでいたところで、過ぎる合戦のおり、戦禍にあつて廃居となった屋敷跡だ。あなたが持っているそのアヤマは、百年に一回、黄金の精をうけて花が咲くと聞いている。きっとアヤマが咲いているところに金子が沢山埋つてあるだろう』と言って、旅の坊さんは、お経をとえながら野原の果てに立ち去って行った。

この話を聞いた部落中の人達、手に手に鍬や鋤をもって我れ先にと『アヤマ』の咲いていた附近を掘り越したが、一枚の金子も、一片の土器のカケラも出てこなかったという。

また、この土地は昔、浪岡、飯詰、十三を結ぶ東日流中山山脈ぞいの街道が通っていたところで、人の往来でにぎわった街道だったという。ここに八兵衛なる盗族の一味が山塞をかまいて、行人人の金や、年貢をうばったところで、その金銀財宝を埋めたところであると、今に伝えられている。

その四 范原の怪

長富に中野新田という部落があり、この部落の附近に小さい范池がある。この部落は、もともと山手にあつて、中野村といつていたが今からおよそ二百年位前、津軽新田開拓にしたがつて、新田に部落中が移住、渺茫とした芦原に老いも若きも汗水流して、鎌を握つて、新田を開墾していたころの話であるという。

ある晩、村の若者が遊びに出たら不思議なものを見た。部落から一町ぐらいはなれた小さな范原のまんなかに、一軒の家が建つていて、白髪の婆さんが薄暗い行燈のしたで糸車を引いていた。また附近の溜池の端にも一軒家が建つていて、老人が草靴を作っている。このあたりには部落の者で家を建てた人は誰もいないのに、家の様子は何百年も前から住みついているように、若者は不思議に思った。

若者は朝になるとわかるだろうと、朝になって部落の人々に夕べの見たままを話し、若者の言つた范原に行つてみると、范原は朝露が光つているだけで、一軒の家も建つていなかった。部落の人達は、若者が夜になると、毎晩夜遊びにでるので狸にでも化かされたのだろうと笑いあい誰も相手にしなかった。

若者は、その晩、村の重立ち(村役)を無理矢理引張り出して連れ出したところ、今夜も婆様は糸をつむぎ、老人は草靴を作っていた。村の重立ちもびっくり、他村から移住してきた者もないのに家が建つている。村の重立ちが家をたづねようとすると、何か空おそろしい雰囲気になつた。このような状態が毎晩続いて、夜になると部落

でも、攻めても落ちない高橋城の攻略に、長者様の一人息子が一方の部将であるところから、長者様を縛上げ、城の前に引き出して、降参を進めたそうだが、城の将兵は誰一人として降参する者がなかつたそう。

なんと、むごいことよな。長者様はどうとう城の前で大浦軍に殺されたそう、またな、息子の母親である婆さんはな。高橋城の親であるところから、范原の中に引き出されてな、大浦軍の兵隊になぶり殺されたそう、その日が高橋城落城の日だったそう。

あんたらがな。中野から、あの范原に村をあげて引越してきたので長者様の婆様わな、また大浦軍が攻めてきたのだからと、亡霊となつて、さまよいてたのだからよ。供養してやんなされ』

村では、范原の一角に地藏堂を建て供養した。和尚がお経を一卷となへおわり、伝太が中天に向つて一発鉄砲を打ちなちと、行燈の灯は消え、婆様の姿も消え、池の端の家も、こちせんと消え去つたと伝う。

翌朝地藏堂に行つてみると、地藏堂のうしろにあつた自然石に一條の血痕が走つていたと云われ、供養した日が、ちょうど飯詰高橋城落城の六月十六日で、これもまわる因果の輪根であろうと、村では語り合ひ、この日を供養の日としたと云うが。

今は、地藏堂の存在も明らかでなく、その范原を婆池と呼び、溜池をオコ溜池と呼んでいる。

の人達は誰も、夜になると出歩くことがなかつた。

そこで部落の人達が重立ちのところを集つて、ああでもない、こうしたらよいと話合つた結果、部落でも指折りの鉄砲の名人、伝太なる獵人が、その正体をあばくことに決つた。

伝太なる獵人、愛用の火繩銃をみがき、弾をこめ、夜のくるのをまつた。ころあいをみて、范原の行燈の火をめぐらして、一発ドカーンと打つた。手ごたえいかにと、しかしてみると、白髪の婆さんが、ニターと薄気味悪い笑い顔を伝太に向けた。

『このくそ婆あ』と、伝太は続けざまに、弾をこめ、打ちまくつたが、婆さんはニターリ、ニターリと糸をつむぎながら、顔を向けるだけで、なんの手ごたえもなかつた。来る日も、来る日も、伝太は夜になると范原の行燈の火に向つて鉄砲を打ち続けたが一向に手ごたえがなく、伝太もつかはれて、妖怪退治をやめるしかなかつた。

そこで村の重立ち連、雁首そろえて考えたが、良い知恵も浮かばらず、とにかく一応村の古老に聞いてみると、村の古老は、

『私もはつきりとは、わからねども、なんでも沼のほとりに昔長者様の屋敷があつたということだ。先祖様から伝えられていることだから、なんかのあたりだべ。くわしいことは、この村の檀家の和尚様に聞いてらわかるべ』と云うので、

重立ち連中、檀家である飯詰のお寺を尋ねた。和尚の言うことには、『去んぬる過ぎし日の、天正十六年六月十六日飯詰高橋城が大浦為信に攻められ落城したみぎり、なんでもその時、その長者様の一人息子は高橋城の一方の部将で、城の旗頭大将であつたそう。その息子も城を枕に討ち死したそう。四方から攻め寄せた大浦軍の大軍は攻め

歴史ポット

津軽藩凶作年次

- 一、元和九卯年大凶作信牧時代
- 二、天和二辰年凶作牧時代
- 三、寛永十七辰年凶作信義時代
- 四、寛永十八巳年凶作信義時代
- 五、寛永十九凶作信義時代
- 六、明暦二末年凶作信義時代
- 七、寛文六年凶作信政時代
- 八、寛文十一年凶作信政時代
- 九、延宝二寅年凶作信政時代
- 一〇、延宝三卯年凶作信政時代
- 一一、延宝七未年凶作信政時代
- 一二、貞享元子年凶作信政時代
- 一三、元禄五申年凶作信政時代
- 一四、元禄七戌年凶作信政時代
- 一五、元禄八亥年大凶作信政時代
- 一六、元禄九子年凶作信政時代
- 一七、元禄十五午年凶作信政時代
- 一八、宝永二酉年凶作信政時代
- 一九、宝永三戌年凶作信政時代
- 二〇、宝永四亥年凶作信政時代
- 二一、享保元申年凶作信政時代
- 二二、享保五年凶作信政時代
- 二二、元文二巳年凶作信壽時代
- 二四、元文五申年凶作信著時代
- 二五、延享二丑年凶作信著時代
- 二六、延享四卯年凶作信寧時代
- 二七、寛延二巳年大凶作信寧時代
- 二八、宝暦五亥年大凶作信寧時代
- 二九、明和四亥年凶作信寧時代
- 三〇、安永五申年凶作信寧時代
- 三一、天明二寅年凶作信寧時代
- 三二、天明三卯年大凶作信寧時代
- 三三、寛政元酉年凶作信寧時代
- 三四、寛政五丑年凶作信明時代
- 三五、文化十四年凶作寧視時代
- 三六、天保四巳年大凶作寧時代
- 三七、天保六未年凶作信順時代
- 三八、天保七申年凶作信順時代
- 三九、天保八酉年凶作信順時代
- 四〇、天保九戌年凶作信順時代
- 四一、天保十亥年不作信順時代
- 四二、慶応二寅年凶作順承時代
- 四三、明治二巳年凶作順承時代

とがなくて
死す

柿本人麻呂と『伊呂波歌』

外崎 三千男



私の研究課題は右を主題とするのであるが、他に人麻呂に関連の万葉集の成立動機並びに、人麻呂を神として、民間信仰をも得ている事項などにも少々触れて見たいと思う。

先ず柿本人麻呂の略歴について旺文社発行の『世界人名事典』から借用して、基礎材料の種にしたものである。他に平凡社の『世界百科事典』からも一部抜粋して補足を期したところもあることを付加する。

一、柿本人麻呂万葉集の歌人（生没年未詳）

古令を通じての大詩人で、後世歌聖と仰がれた。経歴など明らかでないが、皇族の人々の死去を悼む挽歌や、行事に供奉しての歌を多く詠んでいることから、持統・文武両天皇に仕え、宮廷詩人のような役目をしていただと思われ。

身分は低く、最後は、石見（島根県）の地方官吏として、和銅年間（七〇八―七一五）に没したらしい。

万葉集中の歌は、長歌・短歌合わせて約八十首。ほかに『柿本朝臣人麿歌集』から取られたものがある。作風は雄大で荘嚴、序詞や枕詞を巧みに用いて、力強いリズムを作り出している。特に長歌は抜群で

弘法大師の作として定説となつてしまつて、我々も小学校二年の平仮名を全部習得の時点で『いろは歌を習つたが、その際、その作者が弘法大師が作ったとも習つた覚えはなかった。唯。

いろはにはへと ちりぬるをわか よたれそつねな
らむうゐのおく やまけふこえて あさきゆめみし
ゑひもせずん

とあつたと記憶している。

後日、青師入学後、日本歴史の授業時間に、仏教伝来と日本国内に於ける、仏教興隆に与つた留学僧の一人として、空海の事蹟の説明で『いろは歌』にも話が進んで、諸行無常の仏教哲理から、空海程の得造の者でなければ作り得ないだろうと教えられたことを記憶している。それは次の如き解釈からの該当者だという論法であつた。

即ち前述の清音のみの『いろは』を七・五調の『今様』詩文型にして、

色は匂へど散りぬるを (諸行無常)
我が世誰ぞ常ならむ (是生滅法)
有爲の奥山今日越えて (生滅滅已)
浅き夢見じ酔ひもせず (寂滅爲楽)

即ち右の『四字』ずつの『四行詩』の『傷』から感得される人生の有爲転変、仏教の深奥なる哲理を表現していることから、弘法大師程の仏道者の上、万事に多芸多才の点から必然的に弘法にその作者を想定して、今日に到つて、誰も疑いを持たれなくて経過していた。

四、然るに最近『伊呂波歌』の空海作に疑いを持つ者が出て来て、その作者は柿本人麿だといふのである。それは『科なくて死す』

ある。

二、弘法大師（空海）

平安初期の僧、真言宗の開祖、讃岐（香川県）の人、八〇四（延暦二二）年入唐、長安で恵果和尚に真言宗を学び、帰国後高野山に金剛峯寺を開いた。京都に東寺を開いて真言密教の道場とした。

詩文・書道にすぐれ、三筆の一人に教えられている。京都に綜芸種智院を建て、庶民の子弟を教育した。著に『文鏡秘府論』『性霊集』筆蹟に『風信帖』と『灌頂歴名』がある。

三、弘法大師については、歴代日本人の誰もが知っているように、独り仏教の最高体得者であるのみならず、他の各方面にも奇蹟的学植・知慧の持主であつて、正にギリシャの善知全能の神『ゼウス』と称賛しても過褒でないことと思ふ。

それで、『伊呂波歌』の日本の平仮名五十音を一字ずつのみ用いて、しかも仏教の諸行無常の深遠な人間世界の哲理を、余蘊なき所まで歌い上げる学力、詩才は古今を通じて、弘法大師以外に誰も思い当る者もあるまいと、『伊呂波歌』の創作者は弘法大師に違いないといふ仮説が何時の間にか、平安時代に流布されてしまつて、『伊呂波歌』は

という、自分の冤罪を墮く信じ、これを『伊呂波歌』に仮託して後世に訴えたもので。即ち、もう一度左に七音ずつ再録すると、

いろはに へ (1) 一
ちりぬる わ (2) 二
よたれそ ね (3) 三
らむうゐ お (4) 四
やまけふ え (5) 五
あさきゆ み (6) 六
ゑひも せ (7) 七

1 2 3 4 5 6 7
とかなくてしす (科無くて死す)

一 二 三 四 五 六 七
ほをつのこめ (本を津の已女) へ

右の『伊呂波歌』は空海の作だとする仏教の哲理を述べたとするものとは全然違つた、人麿の冤罪を訴え、石見の国のおつちこつち、牢を引き廻され、最後は水牢で処刑されるという覚悟をしている謗念の歌である。

五、人麿の罪状

人麿は、官位は低いながら官廷歌人として、天武・持統両天皇の羈旅に際し、常に供奉して歌を献上し、次第に登用されて皇子・皇太子の教育係にまでなつていた。そして後、石見国（島根県）の地方官にまでなつた。一時用事があつて、都（藤原京）に帰つたことがあつたその時石見の国での第二の妻に対して別れを惜しむ歌

石見のや高津山の木の間より
わが振る袖を妹見つらむか

(万葉第二卷)

で分かる。